

# 印欧語の所有代名詞と人称代名詞属格

塩 田 昇

——は じ め に——

ドイツ語のようなどちらかというと保守的な印欧語では、人称関係から見た所有の観念を表わすのは、人称代名詞の属格, *meiner, deiner* etc. ではなく、規定詞型の付加語的曲用を示す別体系の代名詞, *mein, dein* etc. であり、それを普通、所有代名詞 *Possessivpronomen* (独), *possessive pronoun* (英) と呼ぶ。英語においては、この体系は消滅し、一方、この名称は *mine, yours, his* etc. のまた別の代名詞体系を表わすのに使われるようになってしまっている。正確に言う、古期英語 (以下 OE) の、形容詞 e.g. OE *blind* (男性, 主格), *blindne* (対格), *blindes* (属格) etc.<sup>1)</sup> と同じ曲用をした所有代名詞 *mīn þīn* (上述の独 *mein, dein* と対応) etc. が中期英語以降屈折を失い、人称代名詞属格との区別がなくなり、母音や *h* の前以外では語末の *n* も消えてしまった (*my, thy*)。もう一方、所有代名詞の *mīn þīn* の形態を残す方は、所有者の人称関係を示す機能と被所有物の *pro-form* の機能との合体した二重の代名詞性を持つ極めて限定された別体系となってしまった (*mine, thine*)。いわゆる学校文法でいう所有代名詞である。しかし、印欧語一般の観点からすれば、このような英語における用語法とそれを生み出した文法固有の状況は特殊であり、所有代名詞というとドイツ語におけると同じような使われ方をするのが普通なのである<sup>2)</sup>。以下において「所有代名詞」を、学校英文法的な意味ではなく、ドイツ語におけるような伝統的印欧語比較文法の意味で使うが、「人称代名詞」、「所有代名詞」というような名称の区分にもかかわらず、印欧語の人称代名詞 (の属格) と所有代名詞との間には分かち難い起源的関連が観察され、そしてこの関係は、所有代名詞の成立そのものについての考察に対して示唆するところがあると思われる。本稿はこの面に光を当てようとするものである。

すでに Burgmann (1904) p. 412 は、印欧語の所有代名詞が一部は人称代名詞の属格から生じていること、また逆に、所有代名詞のある曲用形（格形）がそのまま人称代名詞の属格に転用されていることに注目している。印欧語の所有代名詞とは、一般に人称代名詞と繋がりのある語幹に形容詞型変化の語尾が付いたものだが、Burgmann の指摘の前半部については、従来、必要以上に人称代名詞属格形と所有代名詞が結びつけられている。この点に関しては精細に観察して、どの程度両者には直接的な関係があるのか、又、その関係の内容を明らかにしなければならない。そしてこの作業の大枠の中で、Burgmann 指摘の後半分の事実もきちんと位置づけられてくることが予想される。以下、人称別に、各代表的印欧語にあたりながら、この問題を考えてみようと思う。

#### I — 1 人称

Wright (1925) p. 241 は古期英語、1, 2 人称代名詞の属格諸形は対応する所有代名詞の非屈折形 (e. g. 男・中・女性の単数、主格形) と同じであると言っている。ゴート語 (以下 Goth.) については、もっとはっきりと、1, 2 人称代名詞属格諸形は元来、所有代名詞の中性、複数、主・対格形に由来すると言っている (Wright (1954) p.121). OE 1 人称代、属格、単数 *mīn*, 複数 *ūs*, 2 人称代、属格、単数 *þīn*, 複数 *ēower*; Goth. 1 人称代、属格、単数 *meina*, 複数 *unsara*, 2 人称代、属格、単数 *þeina*, 複数 *izwara* であり、特に Goth. *meina* の形態は、1 人称代名詞属格形は本来の人称代名詞の語幹に属格語尾が付いてもたらされたものだとするには何か異質な要素が入っていることをほのめかす。Wright はゴート語に見られるこの *-na-* は *\*-no-* に遡り、1 人称、処格 *locative* を表わす印欧語共通基語形 (以下 I-E) *\*mei-* という語幹と結び付いて名詞を形成する (それ故、形容詞を形成——印欧語では名詞、形容詞は形態論上本質的な差異はない) 接尾辞であると言うが (p.123), この点については他の印欧語と詳しく比較してみる必要があるであろう。

Szemerényi (1980) p. 197 は Goth. *meina* は印欧語共通基語形 *\*mei* と *\*mene* との融合であると言っているが、その *\*mene* はサンスクリット (以下 Skt.) *mama*, アヴェスタ (以下 Av.) *mana*, 古代教会スラヴ語 (以下 OChSl.) *mene*

等によって支えられた印欧共通基語 I-E \*mene であると高津 (1954) p. 251 は考え、それ以上の分析はしていない<sup>3)</sup>。Meillet (1937) p. 335 も同じで génitif tonique として I-E \*mene を考え、それ以上の分析は加えていない。彼は、Skt. mama は本来 Av. mana に見られるような形であるとし、同化によって n→m と変化したと説く（その逆の異化の例としては Szemerényi はヒッタイト語 amel <\*amen(e) を挙げる）。このように \*mene をこれ以上分析できない固有の 1 人称属格単数形であると考えた人が多いのは、多分、サンスクリットの 1 人称所有代名詞の形成の仕方からくるのであろう。サンスクリットにおいては、1 人称単数属格形 mama に更に所有代名詞を形成する -ka- という接尾辞が付き、この māmaka-（最初の a は長母音化するがリグ・ヴェーダ（以下 RV.）では māmaka- のまま）が -a 幹の形容詞曲用をしたものが 1 人称単数（勿論、所有者についての人称、数であり、形容詞としてはすべての性、数、格に互り曲用する）の所有代名詞となる。この形成の仕方から考えられる方向は 人称代名詞属格形 → 所有代名詞 であり、所有代名詞はあくまで 2 次派生的で、その根底こそ、人称代名詞属格の固有の形態であるということである。Macdonell (1916) p. 113, (1927) p. 79 や Whitney (1889) p. 197 はそのように考えているし、Szemerényi (1980) p. 203 も同様である。このような発想からは mama (\*mene) を更に分析しようとはしないであろう。しかし、この考え方は奇妙である。1 人称複数の場合を考えてみよう。Skt. 1 人称代、属格、複数は asmākam であるが、これは少なくとも更に 5 つの要素に分析できるのである：a- は本来の後倚辞 enclitic の対・与・属格形 nas (I-E, 1 人称複数語根 \*nes<sup>4)</sup> = 1 人称、複数・与・属格) の低減階梯 \*ns の n がサンスクリットで母音的に顕われたものであり、-sm- は代名詞によく見られる要素であり、そして -ā でとりあえず 1 人称複数の斜格共通の語幹を作り、——人称代名詞の特定の格形に限定されないことに注意して欲しい——、更に前述の所有代名詞を形成する -ka- が付いて、その形容詞曲用のおそらく中性、単数、主・対格形が 人称代名詞属格に転用されたのであろう (Macdonell (1916) p. 104)。とすると、複数では、既に紹介した方向とは逆の所有代名詞 → 人称代名詞属格形という

方向が働いているのである (Szemerényi は *māmaka* と同じに人称代名詞属格形 → 所有代名詞の方向を考えているが、単数に複数の場合を無理に合わせた感じが否めない)。同じ 1 人称でまったく逆の方向の形成の仕方がとられているとはまったく不可解である。後者の複数の場合の方向が確定的であるのが明白であれば、むしろ疑問に思われてくるのは、1 人称単数の人称代名詞属格形 → 所有代名詞の方向である。更に *asmākam* の形は、意味上、属格とは関係ない他の格（つまり主・対格）が属格に転用されているということでも注目しなければならない。

以上の考察から興味深いのは Schmidt (1978) pp. 92-93 の考えである。彼は *Skt. mama* 等に対して 1 人称、単数、属格に I-E *\*(e)me-ně* を想定して、*\*(e)me-* と *-ně* をはっきりと分離させている。前者は 1 人称の単数、各格形に共通に見られる部分で、別に属格に固有なわけでもない。後者は格語尾とは見ず、むしろ尊格的意味を代名詞に与える副詞要素と考える。それを実証するものとして彼は古代高地ドイツ語（以下 OHG.）*dana* (= 現独 *von da*)、Goth. *þana-mais* (*further* の意味)、OHG. *hina* (= *von hier*) < *\*ki-na*、ラテン語（以下 Lat.）*superně* 「上に、上から」、Lat. *sine* (= *without*)、ギリシャ語（以下 Gr.）*ἐν* 「それを以て」等を挙げている。このようにして彼は *\*mene* という形態の 1 人称属格の固有性を疑うのである。筆者はこのようなことから 1 人称単数の人称代名詞属格形 → 所有代名詞という形成の方向は甚だ疑わしいものと考えざるを得ない。少なくとも Schmidt のように確定的な複数の所有代名詞 → 人称代名詞属格形の方向とは真正面からぶつからない線で、1 人称代名詞の単数属格形の形成由来を与えなければならないであろう。

ゴート語の場合、サンスクリットのような *-ka-* がないので、形容詞曲用の語尾を除けば、人称代名詞属格形と所有代名詞は同じ形態であり、従って、所有代名詞形成の問題にとらわれない最初に挙げた Wright のような、むしろ、所有代名詞 → 人称代名詞属格形の方向が考えられてくるのであろう。そして結果としてはこの方が例の *Skt.* 1 人称代名、複数、属格 *asmākam* が所有代名詞から形成されたという方向と同じで矛盾しないのである (Wright にはこの方

向を採用したもっと積極的な理由があると思われるが、これは III で触れる)。ただ Wright は \*mei という人称代名詞処格形を所有代名詞の更に根底にもってくるが、これは極めて怪しい。これはゴート語や古期英語のゲルマン諸語の当該の語の母音形態を説明するために考えたものであろうが、この点との関連も含めて、-nē の要素をとらないラテン語、ギリシャ語の場合を次に考えてみよう。

ラテン語 1 人称代名詞属格 mei, 2 人称 tui (3 人称については、元来指示代名詞の属格である ejus ではなく、本来再帰代名詞 sui がこの系列) について、Schmidt (1978) p. 138 は、mei は 2 人称 tui からの類推で、tui < \*tew (2 人称語根) + \*i (ラテン語の本来 -O 幹名詞に見られる属格単数語尾) が tuus : tui = meus : x の比例式の左辺を構成していることに基づいていると考える可能性があるとしている。これには tui, mei を直に所有代名詞に起源的に結びつける考えはない。つまり、人称代名詞の語根にいきなり属格要素が付いて人称代名詞属格形 tui が生じ、その一方で、その語根 (のある階梯形) がそのまま形容語幹となって曲用したのが所有代名詞というわけだ。ここには、人称代名詞属格形と所有代名詞とはただもとの語根が同じという点でのみ間接的に関係するという注目すべき考えが内包されているが、2 人称 (あるいは再帰代名詞) については言えても 1 人称についてははっきりと断言できるものか? (類推 analogy 以外の根拠はあるのか?) Schmidt はもう 1 つの可能性も示している。それはラテン語、ギリシャ語以外の印欧諸語の \*(e)me-nē の場合と同じように、ラテン語においても人称代名詞属格形 mei は所有代名詞 meus の男・中性、単数、属格形がそのまま人称代名詞属格に転用されたという考えである。この考え方も類推を根拠とするが、もっと説得力があって、同じ 1 人称代名詞の複数属格形の nostrum が、1 人称複数の所有代名詞の男・中性、複数、属格 nostrum (-um は本来 -O 幹名詞の複数属格語尾、ただし、普通の第 1 種、第 2 種曲用の -ōrum, -ārum ではなく特殊な第 2 種曲用の deus 「神」におけるような -um) をそのまま転用したものであることからの類推に基づく。ついでながら、nostrī はいったん nostrum からの類推でできた mei から更に形態的に

逆類推したものである。筆者には、説明の一般性獲得からこの2番目の考え方の方が可能性が高いように思われる。こうすれば、-nē 要素を含まないラテン語にまで、所有代名詞→人称代名詞属格形の方が確認でき、その分だけ印欧語の広い範囲に亘って、少なくとも1人称の単、複数共に統一的な説明が可能となるからである。

ところで Szemerényi (1978) p. 203 によれば、所有代名詞 Lat. *meus* 諸形は1人称、与・属格 I-E *\*mei/\*moi* に起源を有する。これは元来は *\*(e)m-* に与格を示す *-ei* という語尾が付いたものであり、サンスクリット後倚辞、与・属格形 *me* < *mai* < *\*mei*, ギリシャ語与格形 *ἐμοί, μοι* (この *μοι* は後倚辞、与格形だがホメーロス (以下 Hom.) においては属格としても用いられた e. g. *κλῦθί μοι* 「私に耳を傾けよ」(*κλύω* は属格を要求する動詞)<sup>5)</sup>) 等によって立証されている。注意すべき点は *\*mei/\*moi* は後倚辞的であり、属格に固有の形態ではないということである。所有代名詞属格 Lat. *meī* は古形で *mī* であり (*mī* は *\*moi* に由来する, Szemerényi (1978) p. 201), 更に属格語尾 *-s* が付いて *mīs* にもなるが, *mī* のままで所有代名詞として後代にまで残ったのが *meus* の呼格 e. g. *mī pater* 「我が父よ」, *gnāte mī* 「我が息子よ」である。興味深いのは後者の例にそっくり対応する例がギリシャの悲劇作家たちの表現 *τέκνον μοι* 「我が息子よ」に見られることである (*μοι* は本来与格だが属格に転用されている後倚辞人称代名詞で、ラテン語の場合のような所有代名詞ではない)。ここで明らかになったのは、既に指摘しておいた Wright の, Goth. *meina* の母音 *ei* < Germanic *i* < I-E *ei* の説明として処格形 *\*mei* をもってくる考え方の誤り、あるいは不十分さである。実は Goth. *meina* は Szemerényi の指摘の通り *me-nē* と、ここで取り上げた後倚的与・属格形 *\*mei* との融合であったのだ (処格形との繋がりを言うのであれば、与格に処格的用法があるということである)。

次にギリシャ語についてはどうなのであろうか。1人称代名詞単数属格はアッティカ方言 (以下 Att.) *ἐμοῦ*, Hom. *ἐμείο* だが元は *\*eme-syo* であり、1人称語根 *\*eme-* に代名詞属格に固有の語尾 *-syo*<sup>6)</sup> が付いてできたものである。一方、所有代名詞 *ἐμός, -ή, -ον* は、1人称語根 *ἐμ-* がそのまま形容詞の曲用を

したものであり、人称代名詞属格と所有代名詞との直接的関係はみとめられない。1人称複数の所有代名詞 *ἡμέτερος*, -*ā*, -*ov* において -*τερ*- という接尾辞が付いているのは、ラテン語の *noster*, -*tra*, -*trum* における -*ter*- (-*tr*-) やゴート語の *unsara* の -*ara*- との繋がりを示すが、別にこれによってギリシャ語で、複数において、所有代名詞の形成法のある共通性は暗示していても、人称代名詞属格形と所有代名詞との直接的な関係がラテン語やゴート語のように確認できるわけではない。

以上見てきた所からはっきりしてきたことは、1人称代名詞属格がそのまま所有代名詞に転用される例は、用法上は別にして形態上の起源的な生成関係では、——確かに用法上、*head noun* に対しての関係で、人称代名詞属格が形容詞型の変化をする所有代名詞と同じ意味で使われることは多いのだが、ここで問題にしているのはそれではなく、形態上の転用の関係である——仔細に検討すると、一般の予想に反して、皆無であってということである。とすると冒頭に挙げた Burgmann の前半部の観察は根拠を失ったと言うべきであろう。一般に見られたのはもっぱら後半部の観察に符合する現象である。つまり、ギリシャ語を除いて、サンスクリット、アヴェスタ、古代教会スラヴ語、ゴート語、ラテン語等、所有代名詞のある曲用形（それは属格形であったり、主・対格形であったりするが）が人称代名詞属格形に転用されている諸例の場合である（1人称代名詞単数属格 *\*(e)me-nē* については人称代名詞属格→所有代名詞の方向を実証するものではなく、まったくそれと関係ない成立過程が確証された）。そのギリシャ語でも、人称代名詞属格形がそのまま所有代名詞に形態上転用される例はなかったのである。

## II——2人称

2人称については、Iで述べたことがそのまま言えるので、ここでは更に注目すべきもののみを、あるいは1人称については当て嵌まらない2人称特有の（3人称と共通するものもあるが）問題のみを検討する。先ず、2人称単数属格 *Skt. tava* を考えてみよう。*tava* は極めて特異なことに、それ自体むきだしの語根で（しかも1人称語根とは違う語根構造を持つ）、接辞要素は全然付い

ていない。語根がそのままである格形に使われるというのならむしろ対格が多い：e. g. Gr. 1 人称 ἐμέ (後倚辞 με) <\* (e)me, 2 人称 σε (後倚辞 σε) <\*twe, 3 人称 (本来再帰的) εἰ (後倚辞 εἰ) <\*s(e)we; Skt. 後倚辞 1 人称 mā <\*mé, 2 人称 tvā <\*twē, これらはすべて対格形であり、属格として使われているのは Skt. 2 人称 tava <\*tewe とリトニア語 (以下 Lith.) 3 人称 savė <\*sewe 位であまり例はない。対格形は斜格の代表であり、主格形に特有なそれ専用の語根以外のもの (1 人称では主格, 単数 \*eg-, 属格 \*wei- 以外の単数 \*(e)me-, 複数 \*nes-) や、同じ語根でも主格に特有の内部構造とは違う構造を持つもの (2 人称では、単数の主格の \*tu- の弱階梯と対立する強階梯 \*twe, \*tew や延長階梯 \*twē, 複数の主格の \*(y)ūs <wes の弱階梯——主格には単複通じて弱階梯がきていることに注意せよ——) に対立する強階梯 \*wēs や低減階梯 \*us を持つもの) が斜格形で使われるとなると、先ず対格形で使われると予想されるので (更にその上で、他の格にはそれぞれ専用の格語尾が付加される), 裸の語根が対格として使われるのは十分に理解のいくところである。もし対格であることを更に明示するのであれば、他の斜格形と同じように格語尾を付けられる。その典型は Skt. 対格 mā-m, tvā-m である (ただ、その -m は主格語尾 -am からの類推らしい)。とすると tava はある面で中立的な対格的語根がそのまま属格に転用されたものではないのだろうか (3 人称代 Gr. εἰ <\*sewe は同じ語根構造をしていて本来対格である)。2 人称所有代名詞 tāva-ka (RV. tave-ka) はその対格的語根に所有代名詞を形成する -ka という 1 人称 mama-ka と同じ接尾辞が付いたものであり、人称代名詞格形→所有代名詞という線の転用の方向は考えにくい。つまり、2 人称単数の所有代名詞は中立的な対格的語根を介して、成立起源的にも間接的にのみ人称代名詞属格と関係しているのにすぎないのだ。

サンスクリットにおいて、所有代名詞は -ka を付加することの他に、1, 2 人称、単・複数共、奪格形を語幹にして -iya を接尾辞として付けることによっても作られる (mad-*iya*, tvad-*iya* etc.). しかし正確には——学習便宜上ではない<sup>7)</sup>——奪格形から形成するものではなく、語根に -d- (-t-) 要素を付けたものをもとにして作るということであり、この -d- 要素は代名詞によく見られる代



名詞特有要素である (e. g. 指示代名詞, 中性, 主・対格 tad, Lat. id)<sup>8)</sup>. とすると人称代名詞属格形→所有代名詞の方向はますます怪しくなるのである. 属格という特定の格からではなく, 中立的な性格を持つ語根から, 言わば垂直的方向で, 所有代名詞が作られる例の典型はしかし RV. tva-ka である (Whitney (1889) p. 198). これは再帰代名詞語根 sva- からその所有代名詞 sva-ka を作るのとまったく同じ形成法であるが, この語根 tva- ははっきりと属格に転用される場合の語根内構造とは違っている. つまり先の対格的語根のとは違い, もっと直に, 対格の場合の語根内構造をしている. しかしこの tva- も先の tava も同一の語根である. ただ tava の方がより中立的であり, それは形態の上からも言える (tava <\*tewe は tva <\*twe と \*tew の構造を兼ねているのだ). 後倚辞対格形 tvā や対格形 tvā-m も同じ語根で強階梯の tva- に対して延長階梯 (\*twē) という違いがあるのみだ. 2人称単数の語根の内部構造の variant を挙げると: \*tu (主格), \*twe (tva-ka の場合の中立的対格), \*twē (対格), \*tewe (属格に転用された中立的対格), \*te (与格 \*te-i の場合).

2人称代名詞複数属格 yuṣmākam は1人称の場合と同じように細かく y-u-sm-ka-m と分析できる. y- は2人称複数各格形に共通に見られる y- 要素, -u- は -us- 由来で後倚辞対・与・属格 vas <\*wes の低減階梯, -sm- は代名詞特有要素, -ka- は所有代名詞形成の接尾辞, -m はその所有代名詞の中性, 単数, 主・対格形を示す格語尾である. 考えられるのは明らかに所有代名詞→人称代名詞属格形方向であり, その逆ではない. ここでは, I の所で述べられた主・対格形が属格に転用されているということを思い返して欲しい. 人称代名詞内部で tava は中立的な対格的語根が属格へそのまま転用されたものであることと平行しての, 所有代名詞における対応する現象であるかも知れないことを述べるに止めよう.

### III——3人称

3人称の人称代名詞というものは本来存在しないことに先ず注意しなければならない. 印欧語では3人称を表わす代名詞を使う場合は指示代名詞, 男性 \*so-, 女性 \*sā-, 中性 \*to- の系列をこれに転用するか (e.g. Skt. sa, sā, tad の

場合), 空間の近接関係を表わす \*i-, \*ei- の近接指示代名詞の系列を転用するか (e.g. Lat. i-s (男), ea (女), i-d (中性), Goth. i-s (男), s-i (女), i-ta (中性) (=英 it)) のどちらかであることが多い。しかし, このように指代代名詞から転用された 3 人称代名詞に対しては, それに対応する所有代名詞が欠如しているので, 代名詞性を伴う 3 人称の所有観念を表わす修飾語には, これらの指示代名詞の属格形を使うか (Skt. ta-sya (男・中), ta-syās (女), Lat. ejus, Goth. is (男・中), izōs (女)), ——勿論, 1, 2 人称でも, 所有者観念を表わす場合に人称代名詞属格が所有代名詞の他にも使われが<sup>9)</sup>——あるいは更にまったく別の体系の属格やそれに対応する所有代名詞を転用するかのどちらかである。このまったく別の体系の代名詞とは再帰代名詞なのである。

再帰代名詞のラテン語は対格 *sē* (あるいは *sēsē*), 属格 *suī* (cf. suicide), 与格 *sibi*, 奪格=対格 (古形では *sēd*) であるが, 性・数の区別がないことに注目する必要がある。その属格形 *suī* は 2 人称 *tui* からの類推でできた形態であり, 所有者観念を表わす場合には, 本来, 再帰的な「…自身の…」(*one's own...*) の意味で使われる。この再帰代名詞の語幹をそのまま *meus* 型の形容詞曲用にすれば, いわゆる 3 人称の所有代名詞 *suus*, -a, -um ができる。しかしこの用法も *suī* の場合と同じで, 元来は再帰的である (「彼の父」は *suus pater* ではなく, 指示代名詞を使う *pater ejus* が普通)。この所有代名詞は再帰代名詞の体系と同じく, 所有者での性, 数の区別をしていない (現代フランス語の所有形容詞単数 *son*, *sa*, *ses* が英語の *his*, *her* と違って所有者での性の区別をしていないのはこの名残り) ——勿論, 被所有物に合わせたの性, 数, 格変化はする。再帰代名詞 *sē* にせよ, (再帰) 3 人称所有代名詞 *suus*, -a, -um にせよ, 性, 数の区別のないのは, 屈折言語の印欧語としてはかなり原始的なものであることを暗示している。

ギリシャ語では, この再帰代名詞の系列が人称名詞としてもぐり込んでいる。つまりギリシャ語では, 3 人称代名詞は指示代名詞から転用されたものではなく, 再帰代名詞から転用されたものである: 3 人称代名詞, 単数, 属格 Att. *oû*, Hom. *ēlo* <\*I-E *swe-syo*, 与格 Att. *oî*, Hom. *éoi* <\**sew-oi*, 対格 Att.

ε. Hom. ἐέ <\*sewe であり，根底に再帰代名詞の語根 \*swe, \*sewe がある．3 人称主格が欠落しているのは元来が再帰代名詞であることの証拠である．勿論，これに対応する3人称の所有代名詞 ὅς, ἥ, ὅν は普通の3人称の所有代名詞としても使われるが（主に詩形），ホメーロスに見られるが如く，元は再帰的に使われるのが本当であった．詩形以外の3人称，非再帰の場合には αὐτοῦ, -ῆς, -ῶν (αὐτός, -ή, -ό の斜格諸形は3人称代名詞の代用) が，再帰の場合は ἐαυτοῦ, -ῆς, -ῶν（これら属格も含めて ἐαυτοῦ 以下の斜格諸形がアッティカ・ギリシャ語のいわゆる再帰代名詞）が使われる．高津 (1960) p. 146 によると，所有代名詞 ὅς etc. は本来は3人称に限らず，あらゆる人称に用いられたらしく，ホメーロスにもその多くの例があると言う．とすると \*s(e)we は本来「自身」を意味する名詞語根であったことが予想されてくるのである．日本語でも「私の本」を「自分の本」とも言えるように，3人称のみならずどの人称でも使えたはずである．

以上のような，性，数に限定されない，更には人称にも限定されない再帰代名詞の特性はサンスクリットによく残っている．語根は sva <I-E \*swe であるが，sva- がそのまま複合語の前分になると同時に (e.g. sva-janah 「身内の者，親類」)，代名詞として曲用して再帰代名詞になる：属格 sva-sya (e.g. svasya rājānam 「彼自身の王を」)，対格 sva-m (e.g. svam nindanti 「彼らは彼ら自身を責める」)，sva-yam<sup>11)</sup>，貝格 svena (e.g. svenopārjitam <svena upārjitam 「自身により勝ち得られた」)．この再帰代名詞は3人称に限らず，1, 2人称でも，どの数（当然どの性）でも使える（ラテン語では閉され，ギリシャ語ではかすかにその用法の名残りがあったが，サンスクリットではまったく非限定的に使えるのだ）．sva- に所有代名詞を形成する -ka- や -kiya- を付けると再帰代名詞の所有代名詞ができるが（同じようにどの人称，数に対しても one's own… の意味を持つ），非再帰的な普通の所有代名詞としても使える（主に3人称で）．特に所有代名詞を作る -ka- etc. を付けずに，sva- をそのまま形容詞型にも曲用（と言っても pūrva- 「以前の」と同じようなやや特殊な pronominal adjective の変化だが）できる点は極めて注目に値する．つまり sva- を語根として一方にお

いて代名詞型の曲用がなされ、もう一方において形容詞型の曲用がなされ、この二者はその sva- を根底にして形成されるという点ではまったく平行的で、どちらにも先後の優先がないということである。ここには（人称）代名詞属格から所有代名詞が形成されるという方向は全く観察されないのである。sva- の性、数、人称に限定されない原始性に注目すると、ここに印欧語の所有代名詞と人称代名詞との同等な性格の根源が明示されていると言っても過言ではないだろう。

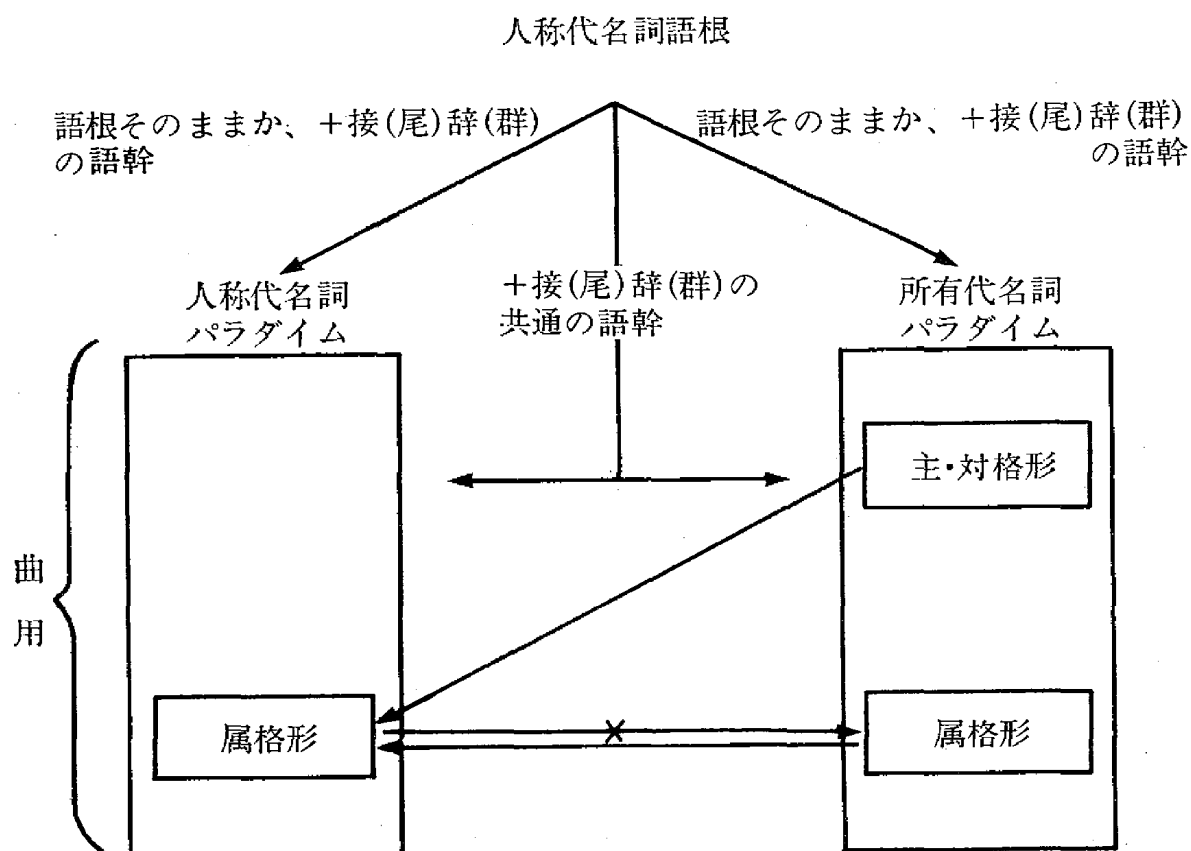
最後にゴート語の場合に触れておこう。ゴート語再帰代名詞は3人称に限定していて、対格 *sik* < Germamic *se+ke* (*se* Lat. *sē*, Gr. *ἐ* と同根)、属格 *seina*、与格 *sis* と曲用するが、ラテン語と同じで性、数による区別はない。*seina* は所有代名詞 *\*seins*（この主格が普通欠けているのは本来再帰的であったからである）の中性、複数、主・対格形 *seina* の転用であり、1, 2 人称の場合と同じように -n- 要素と内部母音 *ei* があるのは、1 人称 *meina* からの類推であろう。その所有代名詞 *\*seins*（とその曲用諸形）は Lat. *suus* と同じく再帰代名詞の系列と同じ語根から形成され、用法も本来再帰的であるので、非再帰的な場合（並びに3人称主格の場合 e. g. 「彼の…が」）には、3 人称代名詞の属格、*is*（男・中性、単数）、*izē*（複）、*izōs*（女性、単数）、*izō*（女性、複数）を代用する。しかしこの所有代名詞と人称代名詞属格の関係は用法上の代用の関係であって、形態上の成立起源的な関係を示すものではないことは言うまでもない。ゴート語の3 人称代名詞は既に触れたように近接指示代名詞からの転用であって、その属格形は本来の属格形であり、形態上は対応する所有代名詞をもともと欠いている（Skt. *ta-sya* の -*sya* は本来の属格形であることを示している）。再帰代名詞はそれに対応する所有代名詞を本来有しているが、その所有代名詞が用法上でのみ、3 人称代名詞属格に繋がっているだけなのだ。

最後に再帰代名詞の語根の variant を挙げてみる：*\*swe* (Skt. *sva*, Gr. 属格 *οῦ*), *\*sew* (Lat. 所有代 *suus*, Gr. 所有代 *ὅς* < *ἐφός* の場合), *\*sewe* (Lith. 属格 *savė*, Gr. 対格) etc. この語根内部構造と variant は2 人称単数語根の場合と極めて似ていることは大いに注目に値する。

#### IV

以上、1, 2, 3 人称を通じての考察から明らかになったのは、印欧語の所有代名詞は決して人称代名詞属格形から作られたものではないということである：印欧語の所有代名詞は、人称代名詞の語根（これは便宜的にそう言うのであって所有代名詞の語根と言ってもいい、要はこの両者、共通の語根であるということ）をそのままにしてか (e.g. Gr. ἐμε-, Skt. sva-), その語根に更に所有代名詞を形成する接尾辞を付けて語幹にしてか (e.g. Skt. sva-ka-, RV. tava-ka-, Lat. nos-ter-(-tr-)), その語根に接(尾)辞(群)を付けて、e.g. 人称代名詞の——と言っても所有代名詞にも見られるのだから人称代名詞固有とは言えない——対格と言うよりも斜格通格的な（つまり特定格と言うより中立的な）語幹にして、更に又、所有代名詞形成の接尾辞を付けてか (e.g. Skt. a-sm-ā-ka-, a-sm-a-d-īya-,<sup>12)</sup> y-u-ṣm-ā-ka, y-u-ṣm-a-d-īya-), 人称代名詞の後倚辞、与・属格形（これとて本来の人称代名詞属格形ではないし、そもそも人称代名詞に固有とも言えない）を語幹にしてか (e.g. Lat meus), 語根に奪格な副詞を作る接尾辞を付けて（又、更に所有代名詞形成の接尾辞を付けて）語幹にしてか (e.g. RV. ma-ma-ka-), あるいは以上の最後の2つの場合を融合して語幹にしてか (e.g. Goth. meins) のいずれかにしたものを形容詞型に曲用させたものである。人称代名詞諸格形は当然以上と共通する語根から作られるが、語根のままで特定の格になるのは対格であり (e.g. Gr. ἐμέ), その後倚辞の場合であり (e.g. Skt. mā, tvā), 更に与・属格の機能をも併せ持つ場合であり (e.g. Skt. nas, vas), あるいは本来対格的なもので属格に転用されたものである (e.g. tava). 他は各格に特有の語尾を語根に、あるいは接(尾)辞(群)を付けた語幹に付けることによって作る (e.g. Skt. 具格, 複数 a-sm-ā-bhis, y-u-ṣm-ā-bhis). 又は対応する所有代名詞のある格形 (e.g. 主・対格, 属格) を人称代名詞の属格に転用するのであるが、決してその逆方向の形成はない。人称代名詞の特定の格に固有な形態を持つものがそのまま所有代名詞（の語幹に）転用される例もないのである。中立的で通格的な対格形や、対格に典型的に見られる語幹、与・属格的な後倚辞、奪格的な副詞形成の接尾辞の付いた語幹等なら所有代名詞との繋がりとはみとめ

られるが、それは所有代名詞との共有部分と解すべきであろう。つまり、所有代名詞は、そこから人称代名詞（属格）への転用こそあれ、人称代名詞とは成立起源的にまったく同等の体系なのだ。以上の関係を模型的に図示すると次のようになる：



#### 注

- (1) Wright (1925) p. 243 も Campbell (1959) p. 290 も blind をもってきているのは、それを以て共に、a-, ō- 幹の形容詞の曲用の代表としているからである。
- (2) ついでながら、フランス語の文法では、所有代名詞 *pronom possessif* というと *le mien, le tien, le sien* etc. を指すので、英文法で言う所有代名詞に近い。ただし、被所有物の性、数に応じる *le mien, la mienne, les miens, les miennes* (以上、所有者、1人称、単数) 等の曲用を示す点と、3人称 *le sien* etc. の所有者での性の区別をしないという点で英語とは異なる。しかし印欧語でいう所有代名詞に連なるのは、むしろこれらではなく、所有形容詞

adjectif possessif と呼ばれる mon, ton, son (son, sa の性変化も所有者での区別ではない) etc. の体系の方である。

- (3) Szemerényi (1980) p. 197 は \*mene むしろ後代の発達で、後に述べる Schmidt の如き (e)me-ně の分析もほのめかしているが、Skt. 所有代名詞、複数 asmāka- にも単数 māmaka- に合わせて、人称代名詞属格→所有代名詞の成立過程を考える無理を犯しており、その基礎である \*mene に対してどの程度この分析を自分のものとしているか疑問である。
- (4) 1 人称代名詞語根は主格の場合と斜格の場合でまったく異なる：単数では \*eg- (主格) (Skt. ah-am, Goth. ik. 独 ich, 英 I) に対して \* (e)me- (斜格)；複数では \*wei- (主格) (Skt. vay-am, Goth. wei-s, 独 wir, 英 we) に対して \*nes- (強階梯), \*ns- (低減階梯) (共に斜格)。
- (5) Wackernagel (1928) p. 76 によると、ホメーロスには他に 3 人称、後倚辞、与格 *oi* が属格に転用された例が見られる。イリアドス (II (Book XVI, 1.531) に ὅττι οἱ ὦκ' ἤκουσε μέγας θεὸς εὐξάμενοιο。「大いなる神が直ちに、祈願した彼の言を聴いてくれたことを」とあるが、3 人称、後倚辞、与格 *oi* は属格に転用されたと解すべきである。ἤκουσε は ακούω の第 1 アオリスト、3 人称、単数の活用形だが、この動詞は属格を補語に要求するのが本来だからだ。更にこのことを立証しているのは、*oi* に結び付く εὐχομαι のアオリスト分詞 εὐξάμενοιο の形態である。これはホメーロスによく見られる、第 2 種曲用の形容詞の属格形であるから *oi* は明らかに属格に扱われているのである。
- (6) この -syo については塩田 (1982) を参照されたい。
- (7) サンスクリット文法では、人称代名詞の場合も、複合語の前分として用いられる形を以て語幹の代表形とするわけだが (e.g. māt-kṛta 「私によってなされた」の mat-, tvád-yoni 「あなたに由来する」の tvad-), そして確かに一部の所有代名詞はそこから作られ、その形態がたまたま奪格形と等しいので、奪格形がよくもち出されるが、それは辻 (1974) p. 69 も指摘するように学習便宜上のことに過ぎなく、成立起源上の真実ではない、Macdonell (1916)

- p. 105 にあるように、ヴェーダではむしろ -d-(-t-) をとらない ma-, tva-, asma-, yuṣma の方が複合語の前分になるからだ (e.g. asma-drūk 「我々を嫌う」, tvá-yata 「あなたに提示された」).
- (8) Renou (1975) p. 368 は複合語前分に見られる奪格形と同じ形態は指示代名詞 ta-d, 関係代名詞 ya-d からの類推としている.
- (9) Macdonell (1916) p. 113 に見られるように所有代名詞が実際に使われている場合は限られているが、成立起源の上での劣勢を示すものではないと思う.
- (10) Gr. ἐαυτοῦ に相当するような ātman- を語幹とする再帰代名詞もあるが、このギリシャ語とサンスクリット語は語源的に同定できないようだ. Monier-Williams (1899) によると ātman- 「魂, 抽象的個我」と同源のギリシャ語は αὐτμήν 「息」 (cf. 独 Atem).
- (11) この形態は複数, 1 人称 vayam, 2 人称 yūyam からの類推で主格形とも考えられるが、理論上、再帰代名詞の主格はあり得ないわけで、おそらく対格形の語幹と語尾の間に -y- が入ったのであろう. e.g. áyujī svayám dhurī 「私は自身を棒につないだ」では対格として使われている. 又、不変化辞として副詞的にも使われる (e.g. svayam avasam 「私は自身で住んだ」). 更にそれ自体で複合語の前分にもなる (e.g. svayam-já 「自身から生れたる」).
- (12) これや後の yuṣmadiya という複数における -d- も奪格のではなく, tad etc. からの類推であることは単数, madiya, tvadiya の場合と同じ. cf. 注(8).

#### 参 考 文 献

- Burgmann, K. (1904, 1970). *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*. Berlin : Walter de Gruyter.
- Campbell, A. (1959). *Old English Grammar*. London : Oxford Univ. Press.
- 高津春繁 (1954). 『印欧語比較文法』 東京 : 岩波書店.
- (1960). 『ギリシャ語文法』 東京 : 岩波書店.
- Macdonell, A. (1916). *A Vedic Grammar*. London : O. U. P.
- (1927). *A Sanskrit Grammar*. London : O. U. P.
- Meillet, A. (1937, 1964). *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*.



nes.<sup>8</sup> Alabama Univ. Press.

Renou, L. (1975). *Grammaire sanscrite*. Paris : Librairie d'Amérique et d'Orient.

Schmidt, G. (1978). *Stammbildung und Flexion der indogermanischen Personalpronomina*.  
Wiesbaden : Otto Harrassowitz.

塩田 昇 (1982). 「印欧語代名詞における -S- 要素についての覚え書き」創価大学『英語・  
英文学研究』第11号 (第6巻第2号).

Szemerényi, O. (1980). *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*.<sup>2</sup> Darmstadt :  
Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

辻直四郎 (1974). 『サンスクリット文法』 東京 : 岩波書店.

Wackernagel, J. (1928). *Vorlesungen über Syntax mit besonderer Berücksichtigung von  
Griechisch, Lateinisch und Deutsch*.<sup>2</sup> Vol. II. Basel: Verlag Emil Birkhäuser & Cie..

Whitney, W. D. (1889). *Sanskrit Grammar*. Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press.

Wright, J. (1925). *Old English Grammar*.<sup>3</sup> London : O. U. P.

——— (1954). *Grammar of the Gothic Language*.<sup>2</sup> London : O. U. P.

#### 辞 書

Monier-Williams, M. (1899). *A Sanskrit-English Dictionary, etymologically and philo-  
logically arranged with special reference to cognate Indo-European Languages*.  
London : O. U. P.